863
120

国立国会図書館　タイトル『水の音』　請求記号 863-120

ガラス使用

863-120

# 水音集序

採茶梅叟。嘗籠紊井堤蛙子。鐘愛
矜惜。宋處宗之雞不翅。金聲玉音。
明霄相唱和。不知老之將至。曰洲
是我之衣鉢也。雖易簀際猶
佛諦其言。屬之房人杉長而逝矣。杉
長嚮已得許可矣。大智大業皆

悉成就。為護師子。受持正風。能獅子
吼。名聞十方。今歲孟冬旬有四日。
有先師大祥之奠。因及斯集云。集
以水音名。蓋取之蕉翁舊池之句
乎。抑將有說哉。昔有人矣。登芳野
而聽鶯。聞其聲而不獲其類。謂之
花聲。臨井堤而聽蛙。聞其音而不

視其形。謂之水音。所謂花聲水音
為之妄耶。然亦音韻圓活。有異乎他。
則彼人是哉。其誰謂之龍聲而不
知類乎。觀夫紀氏之序其古今也。標
出啼花鶯棲水蛙。而言永言之不
可以已矣。蓋又取之音韻圓活。而
非謂數鶯泛蛙之謂也。夫天下之

国立国会図書館　タイトル『水の音』　請求記号 863-120
ガラス使用

鵲蛙也多矣。鵲而鵲舌。蛙而鴉喉。
何以鵲蛙為。然猶謂之鵲蛙。溶〻
者皆是也。渠焉知花聲水音之真
者乎。蓋好言自口。茶乃言自口。花聲
水音。自其口出。而後。復能知其出
者而撰之而已。烏乎。杉長〻水音。
真箇真矣。句〻總是伯牙洋〻。

何取師涓靡〻。物則茶舍遺愛
人則梅門餘芳。花聲水音相唱和
者若干章。勒為一編。播之十方。聊
代笙簫之實。以表歸福之儀。蓋杉
長〻志也。或云。失啼花鵲。梅乎蛙。
所謂晉秦良匠。彥嬡孔速。非邪。
今特擧水音。而遺花聲。何曰。房猶

国立国会図書館　タイトル『水の音』　請求記号 863-120
ガラス使用

有宗拱者。有道上人也。年多於杉長。又老於句矣。固梅門一雙之翹楚也。杉長已有斯集。則宗拱豈堪繼撰乎。吾為言之但之耳。于時享和癸亥孟冬。操筆東都新渠之北岸。

左真逸

# 水乃音

## 蛙小傳

杉長

於武蔵の山吹井堤らうあくにの守の石碑の舊跡を華洛二條の御初にて世を經君と伴ふ武城ふくらう春秋三とせ此風月の右をしの先師梅人の雅名を好き述ひちれと一時沸いりの式割く茶舍乃珍玩をおく孫の文をて師や武道の

竹内文庫

歓ひて堪へ難く呂うしてそ海内にて
編集の企あて為め餌拾ひ笛吹くを
待て却か日を只見ふのみそ矛ハ中れ
るる五月の雨は蛙の出でちきしわる中の
ごとく月完手として死ま門人何のし
ちきうを乞しく故人のみやしを志よ
なるて其秋不佞柔舎を発しく
是を見ては数四の師ゆしきして
見るや杉長彼法師う説ふたうを色



黒く秋ちいさし夜ひく更まハ老猫
いうしを志やうて耳あくしの
居吾妙を雄友と呼ぶう窓れ良却と
雄笛とを茶舎うかりの自讃ちう
かと古今れ清絶却とも更て望ハ
ちく安房へいるる中如式年いりるや
享和改元かのとれ酉の十月十四ちを
志きるを志ちうとのうう式日この師
卵海うるかと海南の宗拱う志ちを世るる

猶ものさうのわたり道より斯文をうし
ちひ正風の大山崩るゝ日を頼み旅
ちゝきして蓑笠を連れ百首の浦よゝ
小舟より乗数里ゝのいたりて回漕
蘋藻繁茂ゝをたゝくゝ鳴戎
ちきはのうちゝるゝ社盟のゝ人ゝ
きゝゝ語ゝり遺愛のあつきをうつし
留と雄をおのれり奉ぬ式役やなげきの
中ゝよろこびたゝゝ不思あふ玄ハ先師



去世ゝ會亭ちゝハ故こゝ追善の連を
動ゝき一字一涙の歌仙を修行し
人ゝとちふ名ゝ人ゝ雄ハ蓑猿の
神ゝいふ例の舟して本更津に渡り
同社春賀ふ大ゝを語ゝ山ゝ山
川ゝ川長ゝ陋庵ふ帰ゝ年第月
すゝちゝあゝハ二ゝ啓蟄の時地中を
出ゝ蒙蟲を追ふ遠邇の詞友句あり
文ゝゝ机上頓ゝつゝ歌賀の

たるものあるべきに見ゆ中にハ中ゆ
ゑ〳〵大なるを見ずして小冊をもてぬ
こと〳〵癸亥冬十月を先師辭世の
三周忌あるべきいさゝか報恩の為火を
うゝきゝ二世安茶菴に文庫を初め
生前の遺稿をこたゝめ吟捜して求ゝ
俱ゆ梓桑ようつし西ゐ〳〵の同袖
告んと爰ふの中しの傳うゝ志ゝ如

水三

## 尋蛙辭

圖南

世を待ゝあるハ是を
彼を得ゝ求ゝなりうゝやいたん
蛙とゝ〳〵古今の席を問ゝにて
華林の御遊ゆ官私の地を問ハ
柳の新去郊の鼓吹山崎の法師を
ゆを法あゝたゝん歌中あるゝ志ゝ
和漢の意識を中ゝひをゝ世いゝ

風物乃ちゝみ消えうせてやあるらん
さに行き去ある國は君と弁まの玉川
を出こうむさしちゝ茶舎うその
香を尋ひ麦売乃茅蜩のいけゐへ
干菓子はもみちかりちる秋乃簷に
月を流く燈火は幽ちゝ笛乃
ちゝ琴乃ちゝを清風朗月時
光るなりし内月や世を朝変暮
化乃しられ月に師も二夜の月を



見収く無何有はさに帰りなん
小蕨の霧歯茶乃雷雲乃尾
を眺し今やあ音の杉長うもたに
冬ちりてしり鳥乃縄蛇ふ形し
虹をたゝ氣乃嶋と生く乃
山吹の春ちりたゝ名ちゝ先作ち生
そは井まや意しきむさし野乃
ちし花巻ゝすもも乃ちく知ちり
眼花井面乃拙しちゝ爾の面乃

水ともいとんう花の玉川の名を也
詩うん爾う曽祖ハ阿翁を戈う
志賀の山ゑりうみ水雲夢を
腹ゑうし五老の戒師う大師号
佛果乃縁をもとうをうん

水仏吉

春の日も雉ゑ中ケて苔初し　成美
畦ゑうへ西の雉ゑきえうう　一茶
啼ゑうゑ長安うゑ紀ゑうを　完来
濁ゑる北友うれゑゑ信ゑ蛙　文足
却ゑ入ゑハ後ゑうゑ蛙ゑ　以足
吹口ゑおいゑゑへうゑ蛙笛　大扉
黄鸝ゑ山ハ啼ゑく蛙の南　沙羅
山寺やうゑ浴ゑ奥を鳴うゑ　祇徳

きちくと雨降て蛙なくよう　春蟻
さては豆まうゑ田井よ初蛙　園女
蛙きのふかちよるを〳〵隅田川　みち彦
草むらの馬酔木咲きそめ〻蛙　菅雅
三日月は入汐蒔き蛙可申　蚊牛
一歩つ〻五百崎遠しゆくて　晴雀
柵下ちらみとせく蛙　可里保
水ちらし蛙鳴きやゆ金砂子　濤月
横おもき松ハ墨ちるかな蛙　雪洞



うち霧む田ちらく蛙ちらく　沖巣
馬士は嶋も見へて居らん武蛙　春賀
蓮瓶の水ちらく初く蛙うゝ　支遠里
野は蛙ゆゝ鳴ちらく　三餘
ゆ者蛙山吹ちらくかさねて　百羅
夕風乃雲ちらく雨ちらく蛙なり　徐来
蛙やかちゝ雲は見む潦　如柳
蛙子の流れて音つ日和のる　知仙
山吹は色ちらくうて蛙蛙　亀静

国立国会図書館　タイトル『水の音』　請求記号 863-120
ガラス使用

月新の蛙ふ動くを田水　菊明
灯乃蕾西太良や明うそ川　梅路
帰や蛙多色自然の竹濁る　花外
山田吉信邸川こかちく蛙　秋策
行水や流るるものを明うそ川　暮九
三界も安し蛙乃多世帯　朝富
水新れ桜ちるせ蛙この邸　青児
深草乃ときき衣着る蛙ふる　華屋
歌くえを雨ふ堤く帰うそ川　知友



雨の野ちとちく雨ふる蛙ふる　巴文
明蛙奏のうゆきあるきて　庖月
星いくれ多田ふ蛙　一松
雨蛙ふをちれて弁格子　青莪
夕景の日あ蛙　楚流
蛙ちく時代を浮ふ蕭条　鳥周
眼たるきに流まきく蛙ふ　梅井
痩見ふ新清れちれの蛙の新　松人
其老も ちくや素を帰蛙　成蹊

先師の笛を吹くものあり

蛙〳〵あつまちからおのの草垣ふ仲生活却や帰蛙　桃阿

松の枝のもに傾く蛙の邪　五竜

蛙子や藪田の氷解てう　梅堂

帰のもの川其古郷う遠ひの　湖月

もも〳〵是ハ諸国一見の蛙ふ　一友

夜や屋や大腰中に帰蛙　池月

只ちら〳〵其伴を帰のもの川　莫非

南志

履捨〳〵涙乃蛙きく日のふ　梅児

明蛙おもを如乃ちけるもち　伍明

蛙ち〳〵や青も青もち見小鞠面　里桂

夕涼て居新門や帰蛙　里候

面提て門へ出ふ夜ぬ蛙ふ　近之

宿のもの〳〵ちの夜暗ちる蛙ふ　松蘿

夕ちの川おくれ筆あ通りりて　楚雀

顔ぬ地平しむ夜や帰のもの　三徑

拍子ふ夜の系蛙ちく蛙　如一

ちくこうち川佃を面白くながめ
不思議ちなる夜の飛蛙　文左
河鹿なきわたる里の蛙小　呉桃
芋麦の葉を河ぐる蛙の角　南居
島新乃近くちなる夜也鳴蛙　素十
猿猴のこゑ新もちなる蛙の形　素白
小山乃湖の星映る蛙　月曉
啼き蛙井をとむさもまれなり　里曉
鳴蛙おもたき夜角と成て　登春

泉水の月も巻りぬるこゑ川　豊英
日の恵を除くくく月ゆ蛙　其柳
飛や蛙啼や蛙の角濁り　澍石
いかり〳〵を語りて蛙きく夜小　民風
河ゑんの日を生ちなる夜の蛙小　五長
啼蛙地乃山吹の新也こゑ　眠虎
夕風の葉平吹入る蛙うち　文茂
江の縁の人平流る蛙うれ　豊浦氏
蛙鳴邪を来く留ち蛙小　成蘿

松賣は家もたつるとも　蛙　百喜
ちく蛙きぬ〳〵の袖乾かす　竜左
蛙呼や水の光てのゆ家子へ　竜尾
うきり帰也叢子なる天下一　草活
帰こゝろ何子出あるく蓮月尼　巴石
蛙岡也何もちくに夜乃人　嵐奴
笛ぬく〳〵流とちるを帰蛙　冨川
おもゝ〳〵なき声を見こゝろ蛙笛　菖蒲
黄島は故実ぬ〳〵て蛙こゝる　琴松

水十

蛙小太郎蛙は京と成る　渠北
蛙に入る道を蛙の鼓楽こゝる　酔茶
道草の駒作き声こゝりうきり蛙　木彡
虫乃老春を蛙子要きり　慕長
蛙集撰ふんを種は御法弟　木几
飛迎て乃乃声ぬ痩こゝる　越児
場老の燃る中こゝる蛙可一南　不孤
声は上遠く仰くたく蛙　文里
せきりくるあハこゝる井の声　無為

○

蛙聞くや池の水は身にかなし　宗拱

啼なくや蛙飛りて夕小雨　宗陽

玉苗乃すくへる蛙この邦　都賀

寂しさや家の内へてゆき蛙　杉長

○

梅人居士

深く時を一物とゆき蛙うち

仰事師恩忘れがたく

志しを俳諧に記念乃

蛙とわくまの味ハ水の

佳物かなえて言葉を

忘れ不ずとなりし先

師匠使へ堤にきり絶
過堤来れとゝ
ゆゑ

享和三癸亥冬

杉長再識

瑞石山人
采菜社蔵

跋

世ゝ作國とゝの所ゝ
苑ゝ和歌を
國のゝ名所に
ゝ雅を、ゆゝ
ゝ雅を作せ
和の音を
書ゝもの

杉長

80
863
120
14200

まいて心田に水を注ぎたい
う祈りの日なり杉なねをかりもとへは
師とよめる杉人の心ひをはるむ
ゆき心山花ふいあもしく我世ひて
世雪の朱も乳きうせと以人世
杉生世人すふ行い

多田岩雄宋美

国立国会図書館　タイトル『水の音』 請求記号 863-120

ガラス使用